

音楽監督インタビュー

いつも楽市JAZZ楽団を先頭立って引っ張ってくださる音楽監督のお二人に、この10年を振り返ってお話ししていただきました。

楽市JAZZ楽団音楽総監督

こーもらんつ16 音楽監督

野々田 万照 先生



こーもらんつ23(U-20含む) 音楽監督

粥川 なつ紀 先生

お客さんが育ててくださった

10年、よく続いたなと思います。ジャズフェスはお客さんがいないと成り立たない。始めたときは、無理じゃないかという意見が大半だった。素人の発表で、お客さんがそんなに入ると思わない。でも1年目に文化センターに800人のお客さんが来てくださったのが大きかった。それから毎年、1000人前後のお客さんが来てくださっていることが、やっていて一番うれしいことですね。プロのようにうまくないのにファンがついていて、あの子上手になったねとか、去年よりよかったとか、市民の皆さんが応援団ようになって育ててくださっているのがこのバンドの面白いところです。

10年続いたのは岐阜市公共ホール管理財団の力も大きいです。公共の文化施設所属のビッグバンドというのは、全国でも珍しくて前例がない。手探りで始めて、ここまで形にできたのは財団の運営努力のおかげです。それから講師の先生たちも、親身になって教えてくださっている。そして団員の間も、家庭があったり仕事が忙しかったりしながらも、音楽に時間を割いてやっている。

苦勞したことは毎回の練習ですね。言ったことが伝わってはいらなだけれど、できない。なんでわからないんだと思っただけれど、それがすぐできたらプロだからね。でも成長したと思いますよ。前は練習で言ったことが翌月になると元に戻っていて、「お前らゴムか」と言っていたけれど、最近は何回も言わなくても済むようになってきた。ジャズやポップスの吹き方が身についたんじゃないかな。ジャズフェスという目標があるのも成長につながっていると思います。それ以外に苦勞したことは何もない。楽しくやらせてもらっています。

もう一つうれしいことがあって、毎回のゲストが、素晴らしい企画で参加してよかった、また呼んでほしいと言ってくれる。招く側の体制や準備など、出演しないとわからないことも含めて、プロの目で見てそう言ってくれるのはうれしいです。

今年の見どころはやはり信長公をモチーフにした曲ですね。2017年は信長公が岐阜に入城して450年で、岐阜市が盛り上がりつつある中で演奏させてもらいます。それからゲスト。岐阜の方を呼ぶのが10周年に一番ふさわしいのではないかとお招きしました。グラミー賞を2回受賞された、世界に通用する正統派トランペットを聞いていただきたいですね。

家族のようなこーもらんつ23の「調和力」

10年、あっという間でしたね。10年前の練習初日は「In the mood」という曲を全員で演奏したのですが、曲が崩壊して最後まで通せなくて。でも半年後にジャズフェスは決まっているから何とかするしかない。財団の皆さんと万照先生、団員の間で頑張ろうと話したのを覚えています。

こーもらんつ23は一人一人の演奏経験がすごく違うので、曲としてまとめるには、それぞれに合わせたコツや練習法を伝えないといけないんです。年齢も中学生から70代と幅広く、伝わる言い方もまったく違う。人生の大先輩は敬いつつも上手に導きたいと試行錯誤する一方で、学生は同じ伝え方ではお尻を叩けない。当初はとにかく悩みましたが、今となってはどんなバンドもどんとこい！かな。

「23」がこの10年変わらず大事にしてきたのは「調和力」だと思います。上手い下手よりも違いを認めてそれを超える素敵能力。金管講師の先生とも一緒に、個人の持ち味を生かしつつ、全体を伸ばしてきました。そして、多くのメンバーが互いに支え合いながら楽しめる関係をつくっていて、家族のようなあたたかさもありますね。ストリートライブで通りすがりの人たちが足を止めてにこにこ笑顔で聞いてくれるのは、「23」というバンドの「人柄」だとわたしは思っています。

今でも大変なのは曲選び。音を出して時間を共有する以上、市民バンドだからという甘えは許されない。お客さんに馴染みがあって楽しめて、しかも年齢も技量も違う団員の間がまんべんなく楽しめる曲を探すのは至難の技。なかなか見つけれず「先生、そろそろ曲決めて～」と言われてしまうことも。他にも、企画の提案をしたり、毎回の練習後に財団の皆さんと話し合いをしたり、万照師匠や「16」の本番のサポートをしたり、裏方としてもできるだけのことをしてきました。本番では、みんなが安心して演奏できるよう整えたいと考えているので、リハーサルでうまくいかなくて楽屋でしょげていたり、一人で固い顔をしている姿を見逃さないように努めているし、仕事や家庭の悩みを聞いたり、恋愛相談に乗ることもありますよ。音楽って、自分自身でもうまく言葉にできない気持ちがあふわ〜と出てくることもあるんです。それを聞いてあげたいし、ステージで解消できれば言うことないですね。

今年の「23」では今までで一番難しい曲を演奏します。春からみんな本当に頑張って練習をしてきました。「U-20」は人数も増え、若者ならではの熱量で、時には悔し涙を流しながらも前向きに楽しんでいる姿に、わたしもつい熱が入ります。これからもそんな仲間をもっと増やしていきたいですね。